

英語英米文学研究

第 39 号

～旅と文学～

- 留学を考えるインタビュー・シリーズ：第三回
藤谷聖和先生へのインタビュー…………… 英語英米文学合同… 1
研究室院生
- 英国ノッチングラムシャーと共生の作家達
—パイロン卿, D. H. ロレンス, アラン・シリトー— … 良 田 玲 子…23
- W.B. イェイツの心の故郷 Sligo への旅 …………… 岡 本 雄 二…49
- 翻訳：キップリングお話し集
—つまりはこういうことなんだよ—…………… 西 平 奈々帆…60

執筆者一覧

- 藤谷 聖和 龍谷大学大学院文学研究科英語英米文学専攻
米文学担当 教授
- 岡本 雄二 龍谷大学理工学部数理情報学科
教授
- 良田 玲子 龍谷大学大学院文学研究科英語英米文学専攻
博士後期課程 3 回生
- 西平 奈々帆 龍谷大学大学院文学研究科英語英米文学専攻
修士課程 1 回生

2010 年度 活動 報告

《談話会》

4 月 14 日 (水) 15 時～16 時半 於 英語英米文学合同研究室

・「くまのパディントンについて」

～登場人物から学ぶ児童文学の果たす役割～

西平 奈々帆 (M1)

《修士論文中間発表会・アメリカ留学帰朝報告会》

6 月 16 日 (水) 15 時～17 時 於 英語英米文学合同研究室

・ 'Magic' of Harry Potter through the analyzation of Joseph
Campbell's Hero's Journey and Witchcraft 堯 義之 (M2)

《談話会：ミステリー研究会—英国語り物の系譜を探る》

6 月 2 日 (水) 17 時半～20 時 於 英語英米文学合同研究室

東野圭吾『容疑者 X の献身』

司会：福本宰之教授

7 月 14 日 (水) 17 時半～20 時 於 英語英米文学合同研究室

桐野夏生『OUT アウト』

司会：山崎弘行教授

9 月 22 日 (水) 17 時半～20 時 於 英語英米文学合同研究室

宮部みゆき『火車』

司会：西平奈々帆 (M1)

11 月 10 日 (水) 17 時半～20 時 於 英語英米文学合同研究室

Ruth Rendell. *Live Flesh*. New ed. Arrow, 2000.

司会：良田玲子 (D3)

12 月 22 日 (水) 17 時半～20 時 於 英語英米文学合同研究室

江戸川乱歩『心理試験』

司会：福本宰之教授

2 月 2 日 (水) 17 時半～20 時 於 英語英米文学合同研究室

Gilbert Keith Chesterton. *The Innocence of Father Brown*. New
ed. House of Stratus, 2000.

司会：山崎弘行教授

2月23日(水) 17時半～20時 於 英語英米文学合同研究室
 Ellery Queen. *Tragedy of X*. Intl Polygonics Ltd, 1986.
 司会：西平奈々帆 (M1)

3月29日(火) 17時半～20時 於 英語英米文学合同研究室
 Ellery Queen. *Tragedy of Y*. Intl Polygonics Ltd, 1986.
 司会：良田玲子 (D3)

《夏季談話会》

8月17日(火) 9時～21時 於 六甲山・オルゴール・ミュージアム他
 環境文学散歩：環境保全と近代産業・持続的発展・持続可能性の視
 点を探る。
 Environmental Literature: Modern Industries, Sustainable
 Development, Sustainability

《夏季合宿》

9月2日(木)～3日(金) 於 滋賀県大津市ピアザ淡海
 Thirteenth International Conference on the Literature of Region
 and Nation—West Meets East—
 地域・国別文学国際学会に参加・聴講
 英語観光ガイド実践：金閣寺，龍安寺，嵯峨野，祇園コーナー，近
 江八幡水郷

《研究発表会》

9月20日(月) 14時～17時 於 清和館 3F
 研究発表

'Magic' of Harry Potter through the Analyzation of Joseph
 Campbell's Hero's Journey and Witchcraft 逸 義之 (M2)
 「EU 域内における言語能力育成について」
 金田尚子 (龍谷大学非常勤講師)

講演

「W.B.Yeats と Sligo town」 岡本雄二 (龍谷大学理工学部教授)

《春期談話会》

2月26日(土) 於 京都市右京区水尾，英語観光ガイド実践
 Guest: Professor Bishop in English studies at the University of
 Auckland, New Zealand

《論文指導》

山崎弘行教授による隔週の個人指導。通年 学期中の毎週水曜日
 修士課程：参考文献の選び方とその推薦と提示。英文文献の購読。
 博士課程：論文対象テキストの詳細と翻訳。論文構成の検討と添削。
 上紀子教授による毎週金曜日の個人指導。
 研究生：論文対象テキストの購読と分析，論文構成の検討と添削。

39号編集後記

—出版するにふさわしい原稿とは何かをめぐって—

今年の雑誌発行は難渋を極めた。原稿が出揃うまでに七転八起の紆余曲折があったのだ。昨2010年11月の第一回編集会議の時点では、5点の原稿が集まることになっていた。ついで、12月早々に論文が一つ加わり6点になった。ところが1月末の寄稿第一回締め切りで2点の原稿が集まらず、その後おめでたい理由であったが、キャンセルの知らせを受けた。その連絡を待つ間、これまで良質な原稿を出す会員の一人に至急の寄稿を依頼した。

その返事のこない内いくつかの思いがけない申し入れがあった。一つは本大学院英語英米文学専攻の教授の一人についている中国からの訪問研究員が、日本語で書いた論文を出版したいので寄稿したいというもので、もう一つは、大学は龍大を出たが大学院は他に移り、今教えているところも龍大ではないが龍大大学院英語英米文学専攻の同窓会に入り、この雑誌に寄稿したいとのことで、学生時代の教授を通じて知らせてきた。双方とも会員の紹介があると言うことで、資格は充分である。それで、こちらからお願いした会員にはお詫びを申し上げて、来年度への寄稿を依頼した。

ところが、実際に原稿を依頼する段になると問題が起り、双方にご辞退いただく結果となった。その頃ちょうど、昨年度の修士課程修了生の大学院『紀要』に載せるべき論文が“没”になったと言うことで、こちらで手直しして載せられないかと検討した。だが、期待に反して、この雑誌でも載せるのは難しいことが判明した。そんなわけで、本数が減ってしまったが、集まった4本の原稿で出版することになった。しかしこれを機会に、この雑誌のあり方を考えてみようと言うことになった。

日頃わが英語英米文学合同研究室では、各大学や研究所、海内外一般出版社からの英語英米文学関係の雑誌の図書館への受け入れ業務を行っている。先ごろ国立H大学の『英語英文学研究』が届いた時に驚いた。挨拶状がはさんであり、そこには“この雑誌の寄稿に関する制限は特に設けませ

ん。広く一般の方からも原稿をお寄せください”とあった。日々英文雑誌を受け付けていると嫌でも気がつくことだが、各研究機関が発行する文学雑誌の厚みが年々薄くなっている。その上、廃止・統合・休刊になる文学関係専攻もあり、又閉鎖される大学もある。その中で、このような勧誘には勇気を感じる一方、ここまで来たかと言う感もあった。念のために、それ以前の号を合研にある限りチェックすると、雑誌の本体の「会員ならびに原稿募集規定」は、「会員の資格そのほかに関する制限は別に設けません。広く一般からも会員を募集します。」と言う項目があり、別に「会員から原稿を募集します。」となっている。即ち、元々入会金と年会費を払えば誰でも投稿できるのである。最近の各雑誌の原稿不足によるものだという解釈もあろうが、他方でこの雑誌には審査を行う編集委員が毎年9名いるので、質を維持する努力はとられているといえよう。

以前から大学で職を得るためには業績が必要と言うことで、出版の機会を求めてさまざまな雑誌が発刊された。その結果業績に数えられるにはより上位の査読委員がいる雑誌に載ることが重要とされ、雨後の筍のごとく乱立した雑誌には院生・研究者の減少と共に十分な原稿が集まらなくなった。そうしたことを反映しての挨拶文ではないかと怪しみ、わが『雑誌』にも思いをいたした。彼等はただ単に出版の機会がほしかっただけなのだろうか、あるいは、それを通じて将来龍大に就職する為の布石を敷きたかったのだろうか、と。H大でもあのようにしているのだから、我々も原稿を集め、査読委員をそろえて、門戸を大きく広げるべきではないのだろうか、いや添削をするのは院生の権限外であろうとも。そうした疑問は、これから四月のオリエンテーションや同窓総会などで話し合っていかれるだろうと思われるので、ここでは先の寄稿辞退者三名について、こちら側の理由を挙げておく。

中国からの訪問研究員は、以前京都内の他の大学院で英米文学を博士課程後期まで学んでいたが、日本語で文学を読んだり論文を書いたりしたわけではない。現在の仕事が中国の大学での日本語教師なので、日本語での出版を望んだようだが、日本語にすでに問題が非常に多かった。また、そ

の訂正を依頼すると、これまで本学教授を含んで三人6回も直したから訂正はもう嫌だとのことだった。確かに訂正が一度では済まないほど体をなしていなかったのである。

元々彼女の論文の文献目録は注と一緒にしていたし、引用文献も注してなかった。それで、引用したものが自分の訳なら「拙訳」として、本文テキストの注を入れてください、そうでないなら訳者・日本語タイトル・出版社を明記して出版年度を入れてくださいと言ったところが、自分の訳ではないと言い張った。しかし、プロの訳ではないことは日本語を母語とする編集者の目には明らかであった。そして後日持ち込まれた改定稿では拙訳になっていた。ただ、問題は文学批評用語にあった。それで再度の訂正を頼んだのだが先のような返事だったのである。このままでは英語英米文学専攻の姿勢が疑われる。

試しに、「日本語を直すことに熱中していた時には気がつかなかったけど、「新しい批評主義」って“新批評”か“ニュークリティシズム”のこと？」と尋ねてみた。すると、「新批評とは……」と“説明”が帰ってきた。確かに中国人は面子を重んじる。が、質問に直接答えずに、あたかもこちらがニュークリを知らないので教えると言う対応をしてくることに驚いた。考えてみれば、初対面の時に名刺を交換したが、彼女のそれには「博士」と肩書きが印刷されており、それに「課程修了」と手書きで付け加えてあった。こんな名刺は即刷り直すべきではなかったか。博士課程後期は一般に修了と言う言葉が使われないし、それを博士だと勘違いしてこの名刺を配っていた日本語教師の原稿は危険である。6回の添削の後にもこうした問題が残っていたのである。

一度の訂正で済むように添削してあげたらたらと考えるのは外国人に母語を教えたことがない人である。我々が英語を学ぶ時でもそうだが、初期の段階で真っ赤になるほど朱を入れられてしまうと学習意欲が衰えてしまうだけでなく、何をどう直されたかがわからなくなる。又、直すほうでも何が書いてあるか判断に迷う。そのような場合はまず、基本的な日本語に直してから、内容や専門用語を整えていかざるを得ない。語学教師でも、この手順を採るはずである、ましてや、一介の編集委員がこれ以上のこと

は出来ない。だが、彼女は自分が日本語教師でありながらその苦勞を斟酌せずに、こちらで勝手に直して出版してくれと言うのである。編集者に対する態度はともあれ、内容が基準に達せずということで、編集会議では不掲載を決定した。

またもう一人は、会員になってから寄稿してもらおうとなったが、年会費を払う前に、春休みを早々に終えて遠い任地にこちらには挨拶無しで帰ってしまった。会員になりたいと言う以上、研究室に顔を出すかと考えていたのは甘かった。その事から疑念が生じた。紹介者の教授も本大学院出ではないので、この大学院の状況に不案内だった可能性がある。院生達は下働きの事務員で、自分が会費を払い寄稿したら、先輩教授に同窓会で面通しをすればよいと考えたのだろう。彼等は文科省が日本中に無駄な大学院を作ったと責めている。その一方で、その大学院同窓会に入りたいと言うのである。こうしたこと—自分の大学の同窓会で活動すれば済むものを、自分が貢献したことのない団体の同窓会に入会したいと言うこと—は何を意味しているのだろうか？ 本学院修了生・中退生は要らないが、大学の教員や大学院教授のポストは欲しいということだろうか。そのように考えるのは、院生の思い上がりと言うべきなのか。

次の修士修了生の論文は、タイトルと内容の不一致に始まり、文献リストがファーストネームのアルファベット順で終わっていた。その後が続いたものは、要求されていない和文サマリーで、要約ではあるが章立てで6ページにも及んでいた。しかも冒頭に abstract はない。長文の引用はなく、本体の中に短い引用符付の付いた引用があるだけである。執筆者に尋ねると、「引用は三行以内の短いものにしろ」と言われたという。主旨導教授が英語母語者であった為に誤解したのである。そのような時に備えて副指導教授が存在するのだが、この教授はそれまでの論文の不足を補って大学院での演習が持てるように自分の論文執筆に忙しかつたのである。他の教授が後一年在学してきちんとした論文を出しなさいとアドヴァイスしたが、この院生は留学期間を含めて2年で終了することに固執した。その為に、修論提出前に指導教授の意見を求めることが少なかったのであって、

必ずしも指導陣に全責任があるわけではない。そもそも院生はもっと他者の論文に目を通すべきである。教授の指導がなくても、それだけで学べたことがたくさんあったはずである。しかしこの論文を読むことが出来て、大学院での指導の実態が垣間見られたような気がした。

最後にもう一例があった。これは今すぐに寄稿するというわけではないが、先に行って寄稿したいがどうだろうかと言う打診だった。紹介者さえあれば、今の投稿内規では可能である。ただ、今までこのように本学院出身者ではないものが会員になったり、寄稿を希望したりすることはなかった。一気に数が増えて、原稿不足を補って余りありそうだが、この雑誌は多くの支持者・支援団体をえて発行されている。それに関係のない寄稿者の増えることをどう判断したらよいのだろうか。しかも、この雑誌には目下編集委員はいても、査読委員はいないのである。このような状況で、先述の国立H大学のように学外に原稿を募ってもよいものが集まらないどころか、外部の人々の為の自費出版雑誌になってしまう。

それなら、せめて自家出版で行きたいというのが、本年度の結論だった。どの大学もこじんまりしたとはいえ、学究雑誌としての堅持を保っている。それはそれで尊敬に値するが、自らの教授達の中にもこの雑誌を他家出版誌と考えていらっしやる方が多いとすれば、せめて見放された現編集部は、のびのびとこの一年なしたことを発表しようではないかと言うことになった。その結果が、この39号である。

(編集委員)

付記：今号はカラーページを導入した為印刷代が嵩み、予算を切り詰める必要があった。その為カラーページを雑誌前部にまとめることになった。結果として、通常のジャンル別修了年度順の編集ができなかったことをお断りしておく。

投稿規定

1. 投稿有資格者は、本会員および本会が依頼した者に限る。
2. 投稿論文は未発表のものに限る。ただしすでに口頭で発表したものについては、その旨を明記すること。
3. 投稿論文の内容は、原則として英米文学・英語学・英米文化に関する論文及び翻訳であること。
4. 長さは、和文の場合 400 字詰原稿用紙 30 枚程度、英文の場合は必ずタイプ (ダブル・スペース) で A4 版用紙を用い 25 枚程度 (1 枚 65 ストローク × 25 行) とする。
5. 書式については、基本的に *MLA Handbook for Writers of Research Paper, Sixth Edition* あるいは『MLA 英語論文の手引第 6 版』(北星堂) に準ずる。
6. 応募原稿締切は、毎年 1 月末日とする。
7. 応募原稿の採否については、編集委員会が審査決定する。
8. 掲載された論文等 (書誌情報、画像情報、本文) の著作権 (著作財産権, copyright) は個人に帰属するが、電子化し公共の利用に供する場合は複製権及び公衆送信権について許諾するものとする。

英語英米文学研究 (第 39 号)

編集兼発行者	龍谷大学大学院英語英米文学会
発行所	龍谷大学大学院英米文学研究室 〒600-8268 京都市下京区七条大宮 TEL (075) 343-3311 代
発行日	2011 年 3 月 31 日
印刷所	西村印刷株式会社 〒602-8246 京都市上京区上長者町通黒門東入 TEL (075) 441-4108 代

The Graduate School Review of the English Language and Literature

Vol. 39

~ Travel and Literature ~

- An Interview with Professor Seiwa Fujitani Conducted
by Postgraduate Students of English,
Ryukoku University
..... Seiwa FUJITANI... 1
- Symbiosis writers in Nottinghamshire
..... Reiko YOSHIDA...23
- TRIP to W.B.Yeats' Sligo
..... Yuji OKAMOTO...49
- Translation: *Just So Stories* by Rudyard Kipling
..... Nanaho NISHIHIRA...60

Published by
The Society of the Graduate School of English,
Ryukoku University